

SEMINAR HOUSE NEWS

セミナー・ハウス No.150

1997.12,1998.1・2・3

=巻頭言=

改めて「大衆化時代の大学」を考える

野田一夫 / 2・3・4

■教育プログラム報告

1. 第24回国際学生セミナー

21世紀に期待される国連の役割 / 5

2. 第176回大学共同セミナー

バブル崩壊後の企業社会とジェンダー / 5・6

3. 第15回大学教員研修プログラム

大学のカリキュラム改革を斬る / 6

■平成9年度教育プログラム白書

/ 7

■平成9年度業務白書

/ 8

■法人ニュース

/ 9

■千人会

会費ありがとうございました

/ 10

千人会員のおたよりから

/ 10・11・12

追悼

/ 12

■寄贈図書・寄付

/ 12

■業務通信

わたしたちの合宿

/ 13・14

■利用状況

/ 15・16

■『大学改革を斬る』

/ 16



Plain living and high thinking

財団法人 大学セミナー・ハウス
INTER-UNIVERSITY SEMINAR HOUSE, INC.

改めて「大衆化時代の大学」を考える

宮城大学学長 野田 一夫

私はこの十年、私立の多摩大学と県立の宮城大学と引きつづき二つの大学の創設に深くかかわり、初代学長を経験しました。むかし大学の研究室に残れと言われた時点では全くなる気もなかったが、結局それを何十年もつづけていた大学教員ですが、日本の大学の在り方に対する疑問がたえずあったので、いつそのこと、人生の思い出に、自分の納得できる大学を創つてみたいと思ったのです。

●世間の常識の通用する大学

多摩大学では三つの方針を打ち出しましたが、この三つは、宮城大学を創つた時も全く変わっておりません。第一は「世間の常識の通用する大学」です。と言うことは、日本の大学を支配している制度・慣習は、世界はもとより、日本の世間の常識に反した独特のものだと、私は考えています。根本的にはそれは、日本の大学人に収支観念が全く欠落していることに起因することのようです。大学という組織でも、一番大事なものは収支です。収入と支出のバランスがとれなければ、国家の財政だろうと地方自治体であろうと、大学であろうと、本来の目的は達成できない。ところが日本の大学人には、企業の営利というものを思みきらう人が多い。収支の観念の欠如からくる幼稚な偏見に過ぎません。

大学人には、営利を目的に活動すれば利益が得られると単純に考える人が多いようですが、現実には、企業が利益を得るのは容易なことではありません。特に最近のような経済環境の中で、企業がまたもな利益を確保するのは、実に大変なことなのです。一方、国や地方自治体、あるいは学校法人の財政にとっぴり依存しながら、大学人が「学の自由」や「大学の自治」をいくら叫んでも、それらは全て空しいものだ、私は昔から考えておりました。

実は営利法人と非営利法人には経営的にみて、それ程大きな違いはないのです。それぞれの活動をするために、どちらの法人形態が有利か、妥当かという、それだけの違いです。非営利法人でも、所定の活動をつづけてゆくためには、さまざまな

コストがかかります。そのコストをカバーするだけの収入がなければ、本来の目的を達成できないばかりか、他人に迷惑がかかります。

では収入は誰がもたらすのか。企業でいえば消費者です。消費者のニーズを充たす活動が利益をもたらし、企業にとって利益はなぜ必要かといえば、まずは、起こりうるリスクを他者に負わせることはできないからです。あるいはまた、将来の発展のための開発費用も積み立てておいた利益をとりくずして支出せねばならないからです。すなわち企業のような法人にとって、利益とは *future cost* であり、経済的な自立、自主的発展のための必要条件です。では、大学はどうか。

米国の一流大学に比べると、日本の大学の財政は学生、というより学生の両親が出す学納金に依存する度合が極めて高い。国公立は国や地方自治体の財政に完全に依存してそのことがはっきりしませんが、私立では、だいたい80から85%くらいが学納金で、残りの大部分は私学助成金です。つまり収入面からみて、日本の大学は例外なく教育機関だと割り切つていいはずで、

したがって、日本の大学教授の大部分は教育サービスに従事するサラリーマンに他なりません。ところが、日本の大学教授には研究者意識は総じて異常に高く、そのことが、教育軽視の最大の原因になっています。大学教授の研究者意識が高い



ことは必ずしも優れた研究成果を生み出すことにつながらなかった反面、それが低調な講義とか、休講や遅刻の野放しにつながってきたことはまぎれもない事実でしょう。

日本では、米国の大学なら当然視されている、シラバス、スチューデント・エヴァリユエーション、アクレディテーション・・・といった慣習や制度がつい最近まで全く無視されてきた原因も同根です。大学も自力で収支のバランスをとってはじめて維持・発展が可能となる法人だとすれば、学生は企業で言えばいわば消費者。教員は学生の満足を常に優先して教育サービスに努めるべきだというのは、私にすればそれが世間の常識。それが多摩大学の創立時の第一方針でした。

●教育を第一義とする大学

第二の方針は、「教育を第一義とする大学」です。これは第一の方針を再確認することのように思われそうですが、実はそういう意味ではありません。研究を大学にとって第二の収入源にしようという方針なのです。

多摩大創設時には、将来教育収入に対して研究収入が3分の1を越えたときに、教育と研究の二枚看板をかがげようと考えましたが、遂に、6年後退任するまでそれは夢に終わりました。主として、いろいろな好条件が重なり、学部教育だけで消費収支バランスが意外に早くとれてしまったことにあります。しかし、大学における研究に対する私の考えは、今も全く変わっておりません。

私は今から約40年近く昔、MIT（マサチューセッツ工科大学）に2年間フェローとして研究に従事したことがあります。最初が一番驚いたのは、MITの収入の半分以上が研究収入だということを知ったことです。授業料収入は20%程度なのに、それでも教育を実にしっかりやっていたことにも感じしましたが、何といつても、国や州、あるいは財団や企業から毎年膨大な額の研究を受託してそれをこなしている一方、各種の自主研究にも毎年相当な資金を投じていることには、頭が下がりました。

日本でいう四年制大学は、現在米国では約1,500校



野田 一夫 (のだ かずお)
1927年生まれ。宮城県立宮城大学学長。
前多摩大学学長。専門は企業経営論。
著に『戦後経営史』『財閥』などがある。

あるといわれます。その中で研究と教育の両方の機能を持つている学校はせいぜい10%位、150校あるかないかじゃないでしょうか。残り全部は教育機関に徹しています。研究者がいらないわけではありませぬ。教員は主としてティーチングスタッフですが、その中で非常に優れた研究をする人も出てきて、だいたい一流大学へ呼ばれてゆきます。

日本の大学独自の慣習として、昔から専任の教員には原則として均等に「研究費」が大学側から支出されてきました。一人当りの金額はわずかなものですが、全体として大学の総支出の中では相当な割合となります。それでは「研究収入」はとなりませんと、一流中の一流といわれる大学でも、ほとんど計上するほどのものではありません。いわゆるわんや、そうでない大学においておやです。つまり収入面からみると、日本の大学という大学は例外なく、れっきとした教育機関に他ならないのです。にもかかわらず日本の大学では一般に、教員の研究者意識が強すぎる反面、教育者意識が低すぎることは、先程申し上げた通りです。この矛盾をどう理解し、またどう解決するかは、これからの日本の大学改革の基本的課題だと思っています。

たとえば明治時代には、日本には数えるほどしか大学がなく、大学教員の数も学生の数も社会的に希少価値でした。少なくともその頃は、大学の教員はほぼ例外なくその道の一流の研究者であるとともに、大学における教育は研究と表裏一体のものであったはずですが、だが戦後の教育改革によって新制大学が生まれ、「教育民主化」の方針に沿って年々大学が新增設されつづけた結果、わが国には今や四年制大学だけで約60校、教員14万人強、学生260万人強を数える状況です。

つまり、大学は完全に「大衆化」してしまっただけでなく、各大学も文部省も滑稽なほど昔風の大学像にこだわっていると思えます。私は米国と同じように日本でも、大学の大部分は教育機関に徹し、学生を満足させるとともに、世間の期待に十分応えるだけの教育成果を挙げようという全力をつくすべきだと考えます。研究機能も兼ね果たす大学は、当然限られた数になるわけですが、その場合も、大学それ自身が研究によって収

入を得られる機関を目指すべきだと考えます。わが国の大学では、教員一人一人がそれぞれの専門分野の研究者として自分でテーマを選び、自分のペースで研究を進めています。少なくとも大学が「研究の府」であるとは、大学が機関として、あるいは組織として研究を進める体制を具備し、単に各種助成団体のみならず、政府や地方自治体、あるいは公益法人や企業からも研究プロジェクトを契約ベースで受注できることだと信じております。

もちろん学術研究には、外部から契約ベースで仕事を受託できない分野も少なくありません。しかし何かの応用研究のための基礎的研究として、遠い未来に実る研究として、あるいは大学の権威を保持し高めるための研究として・・・、世界で一流と評価された諸外国の大学が実に多様なそして深みのある研究に莫大な資金をつぎこんでいることは、その大学の財務報告書の「自主研究」を一瞥すれば明白です。しかしそれらも全て他に依存することなく、大学独自の方針と実力で行なっていることを絶対に見習うべきです。

● 社会人を相手にできる大学

第三の方針は、「社会人を相手にできる大学」です。この方針には、二つの理由があります。一つは言うまでもなく、大学の市場構造に関して今後急速に表面化するであろう変化に対応するためです。これは、少なくとも日本の私立大学ならどこでも意識してそれなりに対策を練っているはずですが、今一つの理由に関しては、最後に申し上げます。

来年度は日本の大学の数は短大を含めると1200校を越えます。今もつてその数は右肩上がりで増えています。終戦後のベビーブームの影響で、18歳人口は1960年代に入ると200万人の増えに乗り、1967年には245万人を記録しました。大学数の増加は、この18歳人口の高位安定と、戦前以来の学歴社会を背景とする大学受験生の増加に支えられたものにはかなりません。

しかし、18歳人口はすでに92年を転機に、趨勢的に減少に向かつており、今年はずでに160万人に

なり、21世紀初頭には120万人まで減少します。もう一つの要件である大学進学熱も一頃の勢いはないとなると、日本の大学の数が今後いつまでも増えつづけると考える人はいないでしょう。すでに大学受験者の数はここ数年目立って減少をみせ、大学とくに短大の中には、受験者数が毎年定員に満たないところもでてきました。

国公立ならともかく私立となると、収入の大部分が学生納付金なわけですから、入学者数が定員に満たない状態がつづけば、当然経営はすぐに行き詰まる。目下のところは、経営の行き詰まりを即倒産という破局につなげないための懸命の努力が、一応関係者の間でどうにか成功裏につづけていますが、近い将来、経営的に行き詰まる大学が各地に頻発することになると、大学の倒産は連鎖反応的に広がり、文部省の「護送船団方式」が崩壊を迎えます。

この時期は決してそう遠い将来とは思えません。同じく「護送船団方式」の崩壊とはいえ、文部省には大蔵省が金融機関に対してやれたほどの対策は期待できません。せいぜい在校生をどこかましな大学にひきとらせてパニックの発生を回避する程度でしょう。そういう意味では、ごく一部の自信満々、ないし鈍感とも驕慢ともいえる大学を除いては、私立大学ならどこでも、市場構造の変化への対策に真剣に取り組んでいるはずですが、どの大学でも考えるのは、ニューマーケットとしての社会人学生の開発です。しかし、古い伝統を誇る有名大学を含めて、もともと高校卒業直後か、せいぜい浪人2・3年までの若者の入学を前提に設立され運営されてきた大学にとって、社会人向けの大学に変身をはかることは容易なことではありません。大学のロケーションや建物・設備はともかく、すでに雇用してしまっただけの教員教育法や頭の切り替えをはかることが至難だからです。

多摩大学を設立するに当たって、われわれはこのことを十分認識していたつもりです。すなわち、高校生とその教師(予備校をも含めて)や両親を相手とする限り、偏差値という単一の基準でできあがってしまった社会的序列は、新設校がどんな教育的努力を傾けても突きくずすことは困難で

す。しかし、あらゆる意味で「社会人を相手にできる」という方針のもとに創られた大学は、必ず近い将来、新設の利点をフルに発揮できるという自信と期待を、われわれはもっていたのです。

米国はもちろんヨーロッパでも20世紀後半、大学生の平均年齢は徐々に上がってきています。経済社会の高度化に伴い、日本的に言う「生涯学習」が、多くの国で時代的趨勢となってきました。

高校を出てすぐ就職した人はもちろん、大学を出て就職した人にとっても、何年かすると職業上の必要から、あるいは学生時代には全くなかった知的好奇心の芽生えから、高等教育への強いニーズが生まれてくるのは、広く一般的な現象となっています。

もし大学がそうした社会人のニーズに応えることができるなら、たとえ18歳人口が減少し、またその大学進学熱が低下しても、新しいそして潜在的にはほとんど無限のニューマーケットを開発することによって、日本の大学は再び春の時代を迎えることができるはずですが、ただし、現場の教員には、新しい緊張と苦勞が伴うことは避けられません。これまでの学生と違って社会人学生は、経済的にも時間的にも遥かに「コスト意識」が高いばかりか、社会人として身に付けた経験と知識に基づいて、授業を厳しく評価するからです。

多摩大学の第三の方針の狙いは、実はこの点にあったのです。一方には、大学卒の肩書きだけが目当てで、向学心のかけらもなく、遊びとアルバイトに励む学生。他方には、過剰な研究者意識のために、あるいは最小限の研究業績もないくせに、教育現場で学生に対し情熱も技量も律義さも示せない教員。「レジャーランド」とまで酷評された日本の大学の改革には、主たる学生を社会人経験者にすることが最も効果的だと信じます。

●21世紀の国公立大学モデル

最後に宮城大学について付け加えさせて頂きます。多摩大学学長在職中から、私は宮城県初の4年制県立大学の創設に深くかかわった後、昨年設立に当たっては初代学長に就任しました。個人的には、公立大学の運営ということに関心がありま

したし、何より、潤沢な創設時の予算を見て、米国の友人が訪ねてきても引け目を感じないだけの大学をつくってやろうという野心もありました。ところが、創設までは多摩大学での経験が、ハード・ソフト両面で十二分に生きたのですが、開学後は、公立大学には私立大学学長の知識や経験が生かされないことを痛感させられました。40年近い実践派大学教授の生活から、中央官庁や地方自治体ともいろいろ接触が多く、行政の何たるかは十分知っていたつもりでした。だが、生まれて始めて公務員として宮城県という役所の内側に入ってみて、「なるほど行政とはこんなことをしていたのか」という新鮮な驚きの連続でした。

多摩大学の時と同じように、建学理念を実現すべく開学まで、キャンパスレイアウトや建物・設備といったいわゆるハード面から、学部・学科構成やカリキュラム・教員といったいわゆるソフト面に至るまで、できるかぎりかわり、またこだわりました。しかし開学した途端、県立大学学長には人事面でも予算執行面でも、ほとんど何の実質的権限が与えられていないことを知らされました。

したがって、昨年4月以来今日までの学長としての私の最大の仕事は、宮城大学建学の理念実現

を阻む「県の制度・慣習」との戦いでした。実に多方面にわたって、何から何までしつこくやりつけてきました。いつか機会があれば、私はこの戦いの記録を何かにまとめたたいと考えています。今日は時間の関係で残念ながら説明を省かざるをえません。

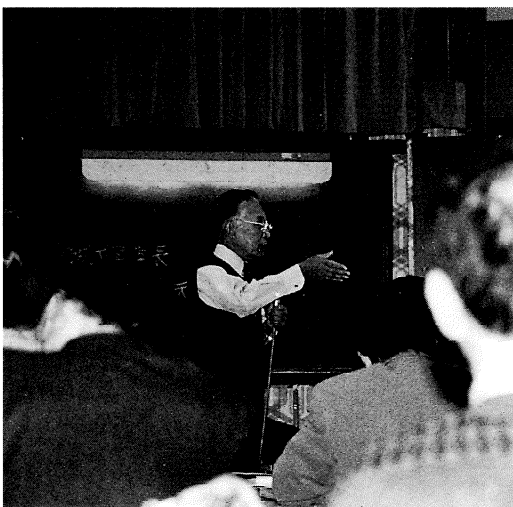
しかし結論から申し上げれば、この戦いの成果は上がり、県はこの4月から私に「公立大学学長としては画期的といえるほどの権限と責任」を委譲してくれそうです。この成功には、いろいろな幸運も手伝ってくれました。たとえば昨年の6月、浅野知事は「県独自の行政改革」を打ち出し、私にもその推進役への依頼がありました。私は積極的にその依頼に応じ、県中枢から県の制度・慣習の改革に対し圧力を加える機会ができました。

またほぼ同じ頃、地元では最強のメディアである「河北新報」から、当地唯一の夕刊紙のコラムを毎週半年間担当してくれないかと依頼がありました。丁度開学直後のテンヤワニヤの時でしたが、自分の主張を支持してくれる世論形成にはこれ以上の機会はないと判断した私は、進んでこれを引き受け、昨年の年末まで前後26回、あらゆる角度からくり返しくり返し現行の県の制度・慣習の非を批判しつづけました。

こういう幸運も大いに作用して、宮城県が県立大学学長の私に大幅な権限を委譲することになったのは、宮城大学を「県の行政改革モデル」として、「活動の自由拡大」とひきかえに、「創造性と活力」にあふれた大学の形成による「財政負担の軽減」を目指してのことです。今や国家も地方自治体も財政が破局に瀕しようとしている時、宮城大学に求められていることは、実は日本の全ての国公立大学が求められていることでもあります。

その意味で、「宮城県の行政改革モデル」は、21世紀の国公立大学モデルにほかなりません。私はそのような自覚と誇りをもって宮城大学建学理念の実現を目指そうと張り切っております。ご清聴、ありがとうございます。

(文責・編集者)



21世紀に 期待される 国連の役割

第24回国際学生セミナー
'97年11月21日～23日

▼ゲスト講演

21世紀の人道問題 — UNHCRの役割 —

国連難民高等弁務官事務所主任広報官

斉藤千香子氏

▼セクション演習

A. 安全保障と平和維持

上智大学国際関係研究所教授 納家政嗣氏

青山学院大学国際政治経済学部教授 土山實男氏

B. 「開発」問題にとりくむ国連システム

一橋大学法学部教授 大芝 亮氏

早稲田大学客員教授 阿部義章氏

C. 冷戦後の米国と国連

聖心女子大学文学部教授 関場誓子氏

日本国際問題研究所主任研究員 星野俊也氏

D. 日本の国連外交

日本大学国際関係学部教授 宇佐美滋氏

中央大学経済学部教授 内田孟男氏

E. U.S.-Japan Relations in the United Nations System

System

筑波大学社会学系教授 佐藤英夫氏

筑波大学国際総合学類教授 ビル・クリアリー氏

【参加状況】114名、37校（男子52名・女子62名）一橋（20）、筑波・早稲田（9）、慶應義塾（8）、日本・法政（7）、聖心女子（6）、国際基督教（5）、埼玉・青山学院・津田塾（3）、長崎・上智・成蹊・東京女子・立教・東洋英和女学院・白百合女子・関西学院（2）、千葉・東京・東京外国語・大阪・神戸・亜細亜・桜美林・恵泉女学院・駒澤・専修・中央・東京薬科・日本女子・明治学院・神奈川・中部・神戸学院・リンカーン（1）

初の国連をテーマにしたセミナー

今年で第24回を迎える国際学生セミナーは、初めて「国連」をテーマに採り上げた。この2泊3日の合宿セミナーで、留学生22名を含めた114名の学生が深夜にわたり熱心な議論を繰り広げた。

セミナーは個別のテーマに分かれて少人数で討論するセクション演習、参加者全員で議論する共通セクション、実際に国連機関で仕事をしているUNHCRの斉藤千香子氏のゲスト講演のプログラムで行なわれた。

セクション演習では安全保障、開発、アメリカの国連外交、日本の国連外交、国連システムにおける日米関係をテーマにそれぞれ深夜まで活発に議論していた。

共通セクションでは、各セクション演習での議論の報告と質疑応答が行なわれた。そこでは、主に日本の安全保障理事会の常任理事

国入りの問題に興味が集まった。日本の常任理事国入りの意味や必要性、また日本の軍事的・経済的貢献が世界および国連自体にどれほどの影響を与えるのか、またそれが求められているのかどうかについて活発な議論があった。さらに、日本が国連を初めとした国際社会の中で、どのような外交戦略を展開していくべきかについて、開発協力や日本独自のシンクタンクの設立にも話が及んだ。

バブル崩壊後の 企業社会と ジェンダー

第176回大学共同セミナー
'97年12月5日～7日

一. 企業社会論とジェンダー論の現在

東京大学大学院経済学研究科教授

伊藤正直氏

二. 日本の雇用慣行と女性

明治大学経営学部教授 遠藤公嗣氏

三. 企業中心社会下のジェンダーそして家族

一橋大学社会学部教授 木本喜美子氏

四. 女性官僚のキャリアパスと個人生活

元経済企画庁調査局審議官

株式会社住友生命総合研究所取締役生活部長

株式会社個人

ソニー株式会社レコーディングメディア

ア&エナジーカンパニー

シニアバイスプレジデント 桐原保法氏

六. 同一価値労働同一賃金で男女差別賃金の

是正を

— インターネットの世界へ広がる女性の

ネットワーク —



今回のセミナーは大人数にも関わらず、参加学生同士、日本人学生と留学生、学生と教員の間での人的・学問的交流が活発で、楽しい雰囲気になった。セミナーの詳細は、国際学生セミナー報告書（'98年5月発行予定）をご覧ください。

ワーキング・ウイメンズ・ネットワー
ク世話人・商社に働く女性の会世話人
越堂静子氏

【参加状況】 14校29名（男子7名・女子22名）
一橋（3）、東京・津田塾・明治学院・早稲
田（2）、東京外国語・桜美林・恵泉女学
園・国際基督教・中央・東京女子・東京薬
科・日本・文教（1）、その他（9）

◆ 大学共同セミナーとしては少人数ではあつ
たが、熱気あふれる3日間となった。社会人
の占める割合が高いセミナーであったため、
テーマに強い関心を持つ学生と実際に企業社
会で働く社会人とが互いに考えや体験に基づ
く意見を交換するなど、大学間の垣根だけ
なく大学と社会の垣根を越えて交流する格好
の場となった。

全体講演による六つの話題提供は2日間に
わたって行なわれた。

まず、伊藤正直氏はバブル崩壊後の企業社
会の変化を述べ、ジェンダー論を概観された。
つづいて、遠藤公嗣氏は日本的雇用関係を
ジェンダー視点から再構成し、変化の可能性
を検討された。

木本喜美子氏は日本型企業社会のジェンダ
ーの配置構造と家族問題の特徴を考察され
た。

新村保子氏は雇用機会の均等が保障されて
いる官僚社会の女性を題材に、新時代の女性
の働き方がどう変わるかを論じられた。

桐原保法氏の話は、氏がオープンエントリ
ー方式で人気の高いソニーの人事の改革発
案・推進者であられたことから、参加者に強
い興味を抱かせ、質問が相次いだ。

越堂静子氏は企業社会における同一価値労
働同一賃金のための運動をご自身の体験や実

践を通して具体的に紹介され、参加者に深い
共感を与えられた。

2日目の後半は話題提供者によるシンポジ
ウム、3グループに分かれての分科会が行な
われ、白熱した議論が深夜まで続けられた。

3日目は学生・社会人による各分科会の報
告と総括討論が行なわれ、正午に充実したセ
ミナーの幕が閉じられた。

大学の カリキュラム改革を 斬る

第15回大学教員研修プログラム
'98年1月24日～25日

▼講演

改めて「大衆化時代の大学」を考える

宮城大学長

野田一夫氏

▼提題

東京外国語大学が目指したもの

—言語を核とした地域文化の総合的理解—

東京外国語大学外国語学部助教授 丹羽泉氏

立教大学全学共通カリキュラムのゆくえ

立教大学文学部助教授

佐々木一也氏

中央大学商学部金融学科の理念と現実
— cool heads but warm hearts —

中央大学大学院商学研究科委員長

建部正義氏

基礎物理学実験の学生たち

電気通信大学電気通信学部助教授

伊東敏雄氏

【参加状況】 64校82名（除講師・運営委員）

東海（5）、岩手・日本（3）、上智・武蔵工
業・文教・敬和学園・松山・日本文理・沖繩
国際（2）、筑波・電気通信・東京学芸・小樽
商科・室蘭工業・弘前・東京商船・金沢・富
山・九州・琉球・大阪市立・大妻女子・工学
院・成蹊・中央・東京工科・東京電気・日本
女子・北海道医療・北海道女子・東北学院・
足利工業・白鷗・聖徳・千葉工業・中央学
院・東京情報・創価・大東文化・神奈川・神
奈川工科・新潟産業・愛知学泉・名古屋学
院・京都学園・高野山・同志社・近畿・阪
南・大阪工業・大阪産業・大阪樟蔭女子・日
本福祉・神戸学院・広島経済・ノートルダム
清心女子・松山東雲女子・産業医科・福岡工
業・活水女子・熊本学園・活水女子短期（1）、
防衛大学校（4）

◆ 今回の第15回大学教員研修プログラム「大
学のカリキュラム改革を斬る」には、全国か
ら64校82名が参加し、1泊2日で行なわれた。

提題では、まず丹羽氏が東京外国語大学の
言語・地域・方法という三つのコンセプトの
選択的組み合わせを特徴としたカリキュラム
の説明と今後の課題について報告をされた。

続いて立教大学の佐々木氏は、教養部解体
に伴い、旧一般教養課程に代わって作られた
全学共通カリキュラムと、その運営組織の現
状および将来の展望について報告された。

次に中央大学の建部氏は、金融学科のカリ
キュラムにおける、教養・公共性の重要性と、
「誰のための何を目的とした学問か」という
専門の意味を問う視点を提起された。

電気通信大学の伊東氏は基礎物理学実験の学
生への基礎的なテストを通じて、現在の学生
の数量感覚の欠如を具体的に示された。氏は、
ここから学生のマニユアル処理思考の問題を
指摘され、昔の教養科目である物理や数学の
基礎科目の重要性を訴えられた。

また、二日目には宮城大学学長の野田一夫
氏による全体講演が行なわれた。氏は、多摩
大学の設立の理念、現在の宮城大学での学長
経験を通し、大衆化時代の大学の在り方を具
体的に提示され、その内容は参加者に強い印
象を残した（詳細は巻頭言をご覧ください）。

総括では、絹川委員長が大学が社会から求
められるものとして、学生の自己決定能力、
具体的には判断力・思考力を持った学生を育
てることを挙げられた。その上で、学生が自
己決定能力を持てるようなカリキュラムが必
要であり、各科目・授業の中で意図的に判断
力・思考力を養う授業が展開されているか、
カリキュラムの構造がどのように組み立てら
れるかが重要であると指摘された。

今回の研修プログラムは、『大学改革を斬
る』（大学セミナー・ハウス発行）を参考資
料として使用した。これは、大学教員研修プ
ログラム委員会メンバーの12時間に及ぶ座談
会の模様をまとめたもの。大学関係者にはぜ
ひご一読いただきたい。詳しくは大学セミナ
ー・ハウス企画室まで。

（☎〇四二二一七六一八五三三）

平成9年度 教育プログラム白書

平成9年度は表1の通り、大学共同セミナー4回、大学教員懇談会1回、大学教員研修プログラム2回、国際学生セミナー1回の合計8回を実施した。

表2は、学生を対象とするプログラム(大

表1 平成9年度教育プログラム開催状況

■大学共同セミナー

回数	期間	主 題	講 師	参加人数
173	1997年 6月13日～15日 (2泊3日)	新しい映画史を考える	四方田犬彦、細川周平、武田潔、小松弘	50名 (18校)
174	7月5日～6日 (2泊3日)	都市と視線 一塔からパースペクティブまで	奈良原一高、山岸健、陣内秀信、田中純、吉見俊哉	70名 (21校)
175	10月24日～26日 (2泊3日)	地球市民になろう 一環境破壊・戦争・貧困・民族紛争の解決の道を探る	油井大三郎、ロニー・アレキサンダー、伊東孝之、石井摩耶子、大西仁、西村洋子、鈴木郁子、高津佳史、大橋正明、島田剛	96名 (31校)
176	12月5日～7日 (2泊3日)	バブル崩壊後の企業社会とジェンダー	伊藤正直、遠藤公嗣、木本喜美子、新村保子、桐原保法、越堂静子	29名 (14校)

■大学教員懇談会

34	1997年 10月4日～5日 (1泊2日)	入試と就職、そのはざまにある大学	阿部謹也、榎學、坂元昂、國井利泰、田中宣秀	45名 (26校)
----	-----------------------------	------------------	-----------------------	--------------

■大学教員研修プログラム

14	1997年 9月20日～21日 (1泊2日)	教える授業から学ぶ授業へ	中野照海、栗田充治、草野厚、佐治俊彦、福田一郎	77名 (54校)
15	1998年 1月24日～25日	大学のカリキュラム改革を斬る	野田一夫、丹羽泉、佐々木一也、建部正義、伊東敏雄	82名 (64校)

■国際学生セミナー

24	1997年 11月21日～23日	21世紀に期待される国連の役割	齊藤千香子、納家政嗣、土山實男、大芝亮、阿部義章、関場誓子、星野俊也、宇佐美滋、内田孟男、佐藤英夫、ビル・クリアリー	114名 (37校)
----	---------------------	-----------------	--	---------------

学共同セミナー・国際学生セミナー)計5回の大学別参加状況表である。参加者総数は62校(昨年69校)・359名(同329名)で、昨年を上回り1回あたりの平均参加者は約72名となった。今年度の参加者の特徴としては、女性の参加者と社会人の参加者の増加が挙げられる。

教職員を対象とする大学教員懇談会と大学

表2 平成9年度教育プログラム参加状況

学校名	男	女	計	学校名	男	女	計
東北	18	10	28	成城		1	1
筑波	7	10	17	聖心女子		7	7
埼玉	3		3	専修	1	1	2
千葉	1	1	2	玉川		2	2
お茶の水女子		1	1	中央	6	6	12
電気通信	1		1	津田塾		5	5
東京	7	5	12	帝京	1	1	2
東京外国語	1	2	3	東京女子		9	9
東京学芸	1		1	東京造形		1	1
東京工業	3		3	東京農業		1	1
一橋	16	12	28	東京薬科	5	1	6
横浜国立	1	1	2	東京理科	1	1	2
京都	2	4	6	東洋	3		3
大阪	1		1	日本	4	5	9
神戸	1	3	4	日本女子		3	3
広島		1	1	武蔵		1	1
長崎	1	1	2	法政	7	4	11
国立小計(17校)	64	51	115	明治学院	3	8	11
東京都立	2		2	立教	1	6	7
静岡県立		1	1	早稲田	12	11	23
公立小計(2校)	2	1	3	東洋英和女学院		2	2
文教		1	1	神奈川		1	1
青山学院	1	3	4	フェリス女学院		1	1
亜細亜	1		1	中部	1		1
桜美林		2	2	関西学院	2		2
共立女子		1	1	神戸学院	1		1
慶應義塾	21	19	40	私立小計(39校)	76	122	198
恵泉女学園		4	4	モンタナ	1		1
国際基督教	1	9	10	リンカーン		1	1
駒澤		1	1	東京都社会事業学校	1		1
芝浦工業	1		1	東京商科学院	1		1
白百合女子		2	2	その他小計(4校)	3	1	4
上智	1	1	2	社会人	17	22	39
成蹊	2	2	4	総合計(62校)	162	197	359

注) 計5回(第173回～176回大学共同セミナー、第24回国際学生セミナー)

注) 総計359名のうち留学生は26名

教員研修プログラムは3回開催し、合計204名(昨年194名)の参加者が国公私立の壁を越えて昨今の問題に関して意見交換を行なった。大学教員研修プログラムは2回で合計159名(昨年150名)の参加者を集めた。特に9月に行なわれた「教える授業から学ぶ授業へ」は、定員を大きく超える申込が殺到し、大学教育に関わる教員同志が、世代を越えて、授業をどうしたらよいかについて積極的な意見交換を行なった。最後に、各プログラムの企画・運営にあられた共同セミナー委員会、大学教員懇談会、企画委員会、国際プログラム委員会、大学教員研修プログラム委員会の各委員、そして各セミナーで講師を務められた諸先生方に改めて感謝の意を表したい。

●年間の宿泊利用者四万五九五人

平成九年年度の宿泊利用者は延べ四万五九五人（月平均三、三八三人）、グループ数は七六六（同六四）であった（表1）。対前年比は一〇、七三四人減で、とりわけ非会員校と企業・社会人団体の減少が目立った。一方、前年度に引き続き受け入れたマレーシア政

表1 利用者別状況表

利用者	人数	グループ数	（ ）内は前年度		比率 (%)	比率 (%)	1団体平均人数
			宿泊実人数	宿泊延人数			
会員校	427(477)	55.7	13,821(15,431)	55.4	20,383(22,766)	50.2	32(32)
非会員校	109(97)	14.2	4,298(4,377)	17.2	8,814(13,005)	21.7	39(45)
大学連合	39(47)	5.1	1,715(1,940)	6.9	2,904(3,577)	7.2	44(41)
学術教育団体	124(128)	16.2	3,499(3,437)	14	5,697(5,539)	14	28(26)
企業社会人団体	67(77)	8.7	1,609(2,215)	6.5	2,797(6,442)	6.9	24(28)
合計	766(826)	99.9	24,942(27,400)	100	40,595(51,329)	100	33(34)

図1 利用グループ構成比

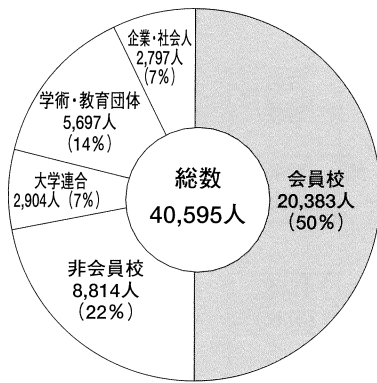
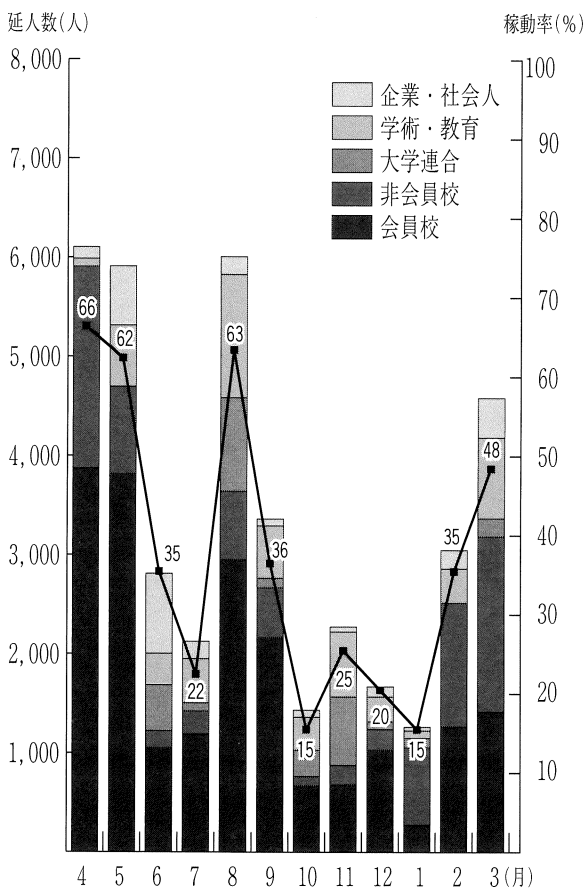


表2 協力会員校最多利用10校

大学名	グループ数	大学名	宿泊延人数
中央大学	56	中央大学	3,219
東京学芸大学	28	明星大学	832
東京都立大学	21	東京工科大学	831
早稲田大学	20	東京学芸大学	751
立教大学	20	東京都立大学	708
日本大学	17	お茶の水女子大学	685
一橋大学	16	日本大学	642
明治大学	15	早稲田大学	587
駒沢大学	14	立教大学	579
明治学院大学	12	明治大学	532

府派遣留学生43名の3カ月にわたる長期滞在は延べ三、〇三六人であった。なお、開館から本年度末まで（32年9カ月間）の宿泊利用者数は延べ一五五万四、八二三人、グループ数は三万一、五九九に達した。

図2 月別・利用者別宿泊延人数と稼働率



●グループ別の利用状況
宿泊延べ人数全体に占めるグループ別の構成比は図1に示す通りである。「会員校」（本年度末現在計六六校）の利用は二万三三八三人で、構成比は五〇％（前年度四四％）であった。「大学連合」には当ハウス主催の各種プログラムをはじめ会員校の教師・学生が多数参加する集會が含まれているので、「会員校」の利用率は実質的にはこれより高い。「非会員校」を加えると大学関係の利用の構成比は計七二％となるが、一方、「学術・教育団体」にも大学関係者が相当数含まれている。
大学関係の利用の主流は、いわゆるゼミ合宿、次にサークル等課外活動の合宿であり、宿泊数では一泊が圧倒的に多い。また、春から夏にかけて、例年、新入学生の合宿研修（オリエンテーション）が繰り返されるが、クラス単位以上の合宿は計五九グループ

●年間の稼働率三七・一％

本年度の当ハウスの稼働日数は、年末年始の休館8泊分と6月の施設整備期間4泊分を差し引いた三五三日で、宿舎（収容定員三三〇人）の年間平均稼働率は三七・一％（前年度四六・九％）であった。図2に月別・利用者別の利用状況と稼働率を示したが、平均を下回る月は、例年同様、年度の後半、秋から冬にかけて多くなっている。

●年間の稼働率三七・一％

（二二校）、延べ八、八四一人を数えた。
なお、ご参考までに、本年度最多利用の会員校一〇校を表2で紹介した。グループ数・宿泊延べ人数とも中央大学が平成元年度以来9年間連続で一位を維持したことになる。
「学術・教育団体」と「企業・社会人団体」の構成比は双方で計二二％（前年度二四％）であった。

平成9年度
第91回理事会・第71回評議員会
'98年3月31日/アルカディア市ヶ谷

【出席者(順不同)】(理事) 佐野博敏、中川秀恭、天城勲、村山松雄、三宅彰、小山由丸、絹川正吉、(評議員) 川原栄峰、板垣興一、井早康正、佐藤保、古浜庄一、朝倉孝吉、望月清司
【委任状による者】理事9名、評議員56名

佐野理事長が議長となり、各議案について逐次提案説明があり、それぞれ質疑応答・審議の結果、いずれも原案通り承認された。

▽評議員人事について
協力会員校の学長交替に伴う東京工業大学学長内藤喜之、東京学芸大学長岡本靖正両氏の評議員新任と右記大学前学長の木村孟、蓮見音彦両氏の評議員退任。内外学生センターの会長交替に伴う新会長佐野文一郎氏の評議員新任と前会長村山松雄氏の評議員退任。協力会員校の脱退に伴う淑徳大学学長長谷川匡俊氏の評議員退任。ブリヂストン取締役相談役石橋幹一郎氏の逝去による評議員退任。

▽役員人事について
協力会員校の学長交替に伴う東京工業大学学長内藤喜之の理事新任と前学長木村孟氏の理事退任。内外学生センターの会長交替に伴う新会長佐野文一郎氏の理事新任と前会長村山松雄氏の理事退任。

▽協力会員校の脱退について
淑徳大学の協力会員校脱退。
▽平成10年度事業計画案および収支予算案について
主要な事項は次の通りである。①協力会員校は59校、準協力会員校は6校で計65校(国立14、公立4、私立47)である。②協力会員校会費、利用料金はともに据え置きとする。③宿泊利用者については、平成9年度は長びく不況による落ち込みに加え、マレーシア政府派遣留学生の規模の半減や大口社会人団体の開催時期変更等に伴う利用中止という特殊事情が重なり、対前年度比21%減の約四万五〇〇〇人が見込まれている。平成10年度も厳しい状況が続く中で、協力会員校ははじめ各方面への一層の利用促進が求められている。その努力目標を含めて利用者数を延べ四万五、〇〇〇人と設定し、これに基づいて前年度より抑制した収支予算・事業計画を立案した。④老朽化の進む施設・設備の改修に伴う固定資産の取得および修繕費に逐年多額の費用を要するようになったが、本年度はユニッ

ト・ハウス宿舍群暖房配管の追加補修、大セミナー室の屋上防水更新、その他の法定保守点検など最小限の予算計上にとどめた。⑤ハウスの教育活動への国庫補助金は、約一六〇万円の減額が見込まれているが、大学共同セミナー、大学院共同セミナー、大学教員懇談会、大学教員研修プログラム、国際学生セミナーなど従来通りのプログラムの実施を予定している。

平成9年度
第2回国際プログラム委員会(正副委員長会議)
'98年2月13日/YMCアレストラン・オーケル

【出席者】宇佐美滋、佐藤英夫、滝田賢治
【ハウス側】企画室スタッフ3名
●主な議事
次年度人事、他。

平成9年度
第1回大学教員懇談会企画委員会(正副委員長会議)
'98年2月19日/YMCアレストラン・オーケル

【出席者】平野健一郎、秀島武敏、中西又三
【ハウス側】企画室スタッフ3名
●主な議事
次年度人事、他。

平成9年度
第3回共同セミナー委員会(正副委員長会議)
'98年2月25日/YMCアレストラン・オーケル

【出席者】宇波彰、伊藤正直、野崎昭弘、伊東孝之、松井孝典、小松弘、宮島喬、市村慎二郎
【ハウス側】企画室スタッフ3名
●主な議事
次年度人事、他。

平成9年度
第4回共同セミナー委員会
'98年3月12日/アイビーホール

第176回大学共同セミナー「バブル崩壊後の企業社会とジェンダー」の実施報告、大学共同セミナー「地球市民になろう2(仮題)」、大学共同セミナー「科学・科学技術と社会(仮題)」、大学共同セミナー「脱工業化社会の「見えざる社会問題」にどう迫るか(仮題)」、第16回大学院共同セミナー「カルチュラルスタディーズ(仮題)」、他。

平成9年度
第6回大学教員研修プログラム委員会
'98年3月27日/アイビー・ホール

【出席者】絹川正吉、原一雄、福田一郎、井下理、佐々木一也、建部正義、中田良平、宮腰賢、山内正平、蟬山道雄、小林志郎、丹羽泉、清水一彦
【ハウス側】企画室スタッフ3名
●主な議事
第15回大学教員研修プログラムの実施報告、第16回大学教員研修プログラムの企画、他。

平成10年度一般会計収支予算書

(平成10年4月1日～平成11年3月31日) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
基本財産運用収入	13,200	---管理費---	105,196,820
会員校会費収入	63,350,000	人件費	59,747,000
事業収入	163,800,000	施設管理費	34,395,000
施設改修協力金収入	7,950,000	一般管理費	11,054,820
セミナー会費収入	8,410,000	---事業費---	144,867,400
補助金等収入	5,539,000	人件費	77,235,000
寄付金収入	180,000	一般事業費	40,732,200
雑収入	4,757,800	普通セミナー事業費	16,217,000
繰入金収入	4,000,000	学生指導セミナー事業費	6,902,100
		国際学生セミナー事業費	3,781,100
		固定資産取得費	7,000,000
		予備費	935,780
当期収入合計(A)	258,000,000	当期支出合計(C)	258,000,000
前期繰越収支差額	100,123,833	当期収支差額(A)-(C)	0
収入合計(B)	358,123,833	次期繰越収支差額(B)-(C)	100,123,833

(注) 消費税の処理は税抜き方式によっている。

平成10年度千人会会計収支予算書

(平成10年4月1日～平成11年3月31日) (単位:円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
会費収入	3,300,000	印刷製本費	200,000
雑収入	60,000	払込手数料	35,000
		繰入金支出	4,000,000
当期収入合計(A)	3,360,000	当期支出合計(C)	4,235,000
前期繰越収支差額	26,300,000	当期収支差額(A)-(C)	-875,000
収入合計(B)	29,660,000	次期繰越収支差額(B)-(C)	25,425,000

(注) 消費税の処理は税込み方式によっている。

千人会

97年12月～98年3月

▼会員数11, 四〇九名

◆会費ありがとうございました

大島葉子、中井虎一、隈部直光、尾田幸雄、竹内啓一、遠藤卓郎、上田和宏、池田温、平松幸一、岡惺治、有山正孝、藤林宏一、松本幸一、澤孝一郎、今井哲哉、矢澤修次郎、生山智己、福井憲彦、佐藤東洋士、茂木誠陸、浮田久子、鈴木順子、徳重昌志、吉田豊、大塩俊介、石田孝夫、横沼健雄、内藤正、濱川祥枝、小西正捷、佐藤共子、大須賀節雄、川鍋正敏、佐藤豪、飛田茂雄、江村裕文、金台然、青柳総太郎、茂木利一、福原満洲雄、川端香男里、秋間実、山田圭一、田中國昭、兵頭圭介、池川郁子、塚本利明、上田明子、伊藤学、三浦永光、三浦安子、栗田寛、慶伊富長、師岡孝次、上山碩、新城信枝、城謙輔、山科高康、岡崎正、渡辺恭章、鈴木博、黒田成俊、外間寛、田原勘意、竹林代嘉、大口勇次郎、一番ヶ瀬康子、小菅敏夫、小林哲也、鈴木皇、佐藤進、鴛田忠彦、後藤聰一、小山弘志、松澤正夫、齊藤耕二、大川信明、田中慎也、川崎正三、國分康孝、慶谷壽信、志島學修、京藤哲久、佐々木良一、武田昌輔、大森東亜、山科高康、平木典子、乾崇夫、中

島力、西川大二郎、池井優、新井明、小野寺嘉孝、山田辰雄、渡辺忠胤、越智昇、麻生幸、小川洋輔、石川道夫、上谷琢之、本田和子、清水畏三、木村宗男、高橋昭三、北原文雄、松山正男、中田良平、山住正己、富沢賢治、柳父圀近、東川清一、佐藤音彦、新保清子、谷口修、小川政亮、中富光國、海老沢信一、根岸愛子、石井正博、江藤一洋、金子ハルオ、鎮目和夫、亀岡篤、柳澤富雄、山本和代、滝口亨、山口俊夫、岩佐凱實、油井大三郎、谷資信、本谷勲、箕輪成男、森昭彦、井原恵治、白井克彦、猪瀬博、遠藤平治、松田安弘、高橋恒郎、寺東寛治、島田外志夫、出光直樹、新澤雄一、板垣雄三、石堂常世、斎藤眞、鈴木陽子、大岡信、石井素介、建部正義、原田敬一、風間邦光、福永壽巳夫、中村妙子、小林一彦、野澤辰、増澤利幸、高松正昭、森久、平野由紀子、秋間実、肥前栄一、江幡玲子、中村孝之、磯直道、泉敏彦、箱木眞澄、笠耐、西川恭治、富塚文太郎、安藤英治、島美喜子、竹村五夫、藤井良治、百瀬宏、東洋、井村君江、蓮見音彦、人見宏、高橋誠、宮腰賢、山田耕司、壽里茂、斎藤幸一郎、豊田陽子、寺中良一、一松信、古賀正則、麻島昭一、谷口汎邦、柘植敏治、馬越徹、土井恵美子、島田治夫、萩原稔、勝見允行、大頭仁、横山実、大山乃富子、絹川正吉、保坂純子、茅野良男、木村建一、藤木宏幸、高橋和之、深沢俊昭、岡村総吾、白川和雄、山澤逸平、鬼塚

宏太郎、大西清、佐野博敏、梶原豊、戸田三三冬、森山ヨシ子、河村フジ子、若山邦紘、高瀬文志郎、柴田泰比古、茂木光子、福西基、春田素夫、小倉芳彦、小山五郎、市川邦彦、木田宏、吉沢四郎、福田一郎、熊田陽一郎、鈴木三男吉、保坂栄一、渡利千波、松崎義徳、大河内正陽、室本誠二、松澤通生、手塚喬介、(敬称略)

◆千人会員のおたよりから

●老化・耄碌して仕事の能率が落ちたせいでしょう。忙しい毎日を過ごしています。本年は2回お世話になりました。来年4月末にまた学生をつれて参ります。
(駒澤大学教授・竹内啓一)

●大学セミナー・ハウスの着実な前進は本当に心強いことです。Simple Life, High Thinkingの普及を願っております。
(創価大学教授・池田温)

●お陰様で大病後12回目の誕生日を無事迎えることが出来ました。教職員組合の仕事を通して、21世紀に向けての大学づくりに微力を尽くしたつもりです。
(大東文化大学教授・鈴木順子)

●今年も健康でお心のこもったパスデー・カードを頂くことができました。例年のこと乍ら些少の会費をお送りいたします。ハウスの一層の御発展をお祈り申し上げます。
(濱川祥枝)

●50年に亘る大学教職が終り、さらに学術会議会員の任務も終了しましたので、今夏から穏かな生活を楽しんでおります。ただ、教育に関する勉強会には出席させていただいており、また大学の外部評価に参加させていただく機会もあります。大学セミナー・ハウスの御発展を祈ります。
(佐藤豪)

●定年に加えて体調を崩し、外泊が難しくなりましたので、勝手乍ら退会させていただきます。中央大学の国際交流(短期留学)で何度もセミナー・ハウスを利用させていただきました。感謝いたします。今後ともどうぞ学問教育・文化交流のために皆さまが御活躍を続けて下さるよう期待しております。
(飛田茂雄)

●本年2月誕生日のカードをいただきましたながら、当時もその後も妻の入退院のくりかえしということもあり会費をお送りしそびれておりました。現在は妻もかなり元気になりました。小生自身はおかげさまで元気いっぱい、翻訳など仕事もすこしずつ進めてきました。みなさまよいお年を！
(東京都立大学名誉教授・秋間実)

●97年の誕生日祝いカードを賜わり誠に有難うございました。健康で生きていくことに感謝して千人会の会費をお送り申し上げます。
(岡崎正)

●11月26日生れ、お誕生カードお送り下さりありがとうございました。何時も岡宏子先生の直筆が楽しみと生に励みになっておりまし

たが……。今年も私も思わぬ事故で会費の納入がおくれました事、お詫び申し上げます。

(文京区立教育センター・新城信枝)

●パスデーカードをありがとうございました。77才になりましたので少々ですがプラスして会費をお送りいたします。ご発展をお願いいたします。

(慶伊富長)

●1日平均7・8通の千人会会員への一言ずつ挨拶を書かれるのは、年賀状の添え書きを毎日なさっているようなもので、大変なお仕事と存じます。私も学部長という役職に就いてその種の仕事の大変さが判って参りました。健康で常勤である間A会員になりたく存じます。

(宇都宮大学教授・鈴木博)

●定年後7年77歳の誕生日を無事に迎えることが出来感謝に耐えません。そのうえ千人会A会費を続けられる御恵みに与かり至福の感慨を味わっております。館長先生を始め職員の皆様のおえに神の御恵みが豊かに授けられますよう祈るばかりです。日本の心の拠り所として地の光り、地の塩とされますよう祈りつつ。(東洋大学名誉教授・大川信明)

●誕生日のお祝いのお手紙いつも有難うございます。家内の母が急に足が動かない状態になり、家内の姉妹四人が交替で面倒を見る様になって年を越しました。思うように介護してあげられず、いま施設か病院を探しています。会費おそくなりました。今年も宜しく。92歳だと大変です。

(松澤正夫)

●皆さま健やかに新年を迎えられたでしょうか。岡先生お変わりありませんか。私は脳の手術をした事はウソのように元氣と忙しさをとりもどし(?)ました。

(日本女子大学教授・平木典子)

●今回を最後に千人会から退会したいと思えますのでそうにお計らい下さい。私も古稀を迎えました。その前に岡先生にお目にかかるつもりでしたが、昨年11月に心筋梗塞になり、その後の体力回復にまだ自信がありません。岡先生もどうぞ御自愛専一に御健勝を祈り上げます。

(中島力)

●大学セミナー・ハウスの一層のご発展と岡先生のご清栄を心からお祈り申し上げます。お陰さまで私は年相応のテニスを楽しんでおりますのでご放念下さい。例年通りB会員の会費をお送りしますのでご諒承下さい。先はご挨拶まで。合掌。

(上谷琢之)

●昨年は久方ぶりにお世話になりました。快適にゼミをもたせていただき有難うございました。今年も参上しますのでよろしくお願ひします。

(創価大学教授・越智昇)

●新年を迎え益々のご発展を祈り上げます。'83年11月に八王子千人同心研究会を法政大学村上直教授を顧問に発足、満5年を経ました。現在会員40名程の会ですが、年々研究を積み上げたいものと念じております。

(八王子市文化財保護審議会長・渡辺忠胤)

●最近ではセミナー・ハウスを利用することも

なくなりましたが、共に学んだあの自然に満ちた環境を思い出します。セミナー・ハウスの発展を祈っております。(78歳になりました。)

(東京理科大学名誉教授・北原文雄)

●キャンパスの雪は如何でしたか。もう少々若ければ雪かきのお手伝いにかけてけるとろです。

(セミナー・ハウス元職員・新保清子)

●上野敦男教授と、そのゼミ生と共に訪れた大学セミナー・ハウスのキャンパス。秋の紅葉もすてきですが、冬のクリスマスツリーも一興。四季折々の散策がとても楽しみです。

(山梨学院大学・海老沢信一)

●一、四〇〇人をこえる会員1人1人の誕生日を把握をされているのも大変ですね。小生も妻と死別して4年になろうとしています。幸いに今のところ元氣で満78歳を迎えます。貴ハウスの御活躍を祈ります。

(小川政亮)

●私は、今春で、2期4年の大妻女子大学社会情報学部長の任期を満了します。後任は、ご存知の野崎昭弘教授です。春には、また新入生とともに伺います。

(金子ハルオ)

●ともかくも無事な日を重ねられることを感謝して今年のC会費をお届け申し上げます。岡館長先生はじめ職員皆さまのご健康を念じ上げます。

(麻布高等学校校教諭・森昭彦)

●誕生カードを毎年お送り頂き、恐縮に存じます。小生は元氣です。セミナー・ハウスのご発展をお祈り申し上げます。不一

(井原恵治)

●いつの間にか77歳と相成り、我ながらよくもったものと思いつつ、残された僅かな人生、大切に使うてゆきたいと願っております。いつか、今一度利用させていただくのを楽しみにしております。

(齋藤眞)

●日本司法書士会連合会でお借りすることが無くなり、私自身も寂しく思っております。グループ研修におねがいする際にはよろしくおねがいします。岡館長様のご健康をお祈りいたします。

(司法書士・風間邦光)

●お陰様で75歳の誕生日を迎えようとしております。緩りであっても基礎研究の歩みを続けておられるのは幸福なことだと思っております。

(聖心女子大学名誉教授・野澤晨)

●いつもごていねいな誕生日カードをありがとうございます。元氣で過ごしております。今年日本会計研究学会の第57回全国大会の開催を引き受けましたので、多忙な一年となりそうです。(明治学院大学教授・高松正昭)

●2月3日、古稀を迎えました。おかげさまで元氣いっぱいです。当面、数年前から取り組んでいる大部の翻訳の仕上げに微力を傾注してまいります。

(東京都立大学名誉教授・秋間実)

●今年当地では雪が多く閉口しました。その分春がまち遠しいこの頃です。

(長岡技術科学大学・泉俊彦)

●宛名(カードの)が岡先生の字でなかったので具合でもよくないのかと心配しております。

す。それにしても会員がふえないですね、大学はふえているのに……。

(日本女子体育短期大学助教・江幡玲子)

●御祝辞有難うございます。館長先生の御健康を案じております。私も1ヶ月入院していましたが先週退院し誕生日のワインは自分の食卓で呑めそうです。

(安藤英治)

●なんとか還暦を迎えました。岡宏子館長先生の活力にあやかりたいと思っています。

(東京学芸大学教授・宮腰賢)

●めぐり来し、わが誕生日、生かされて84回感謝のみ。

(司法書士・高橋誠)

●今年3月末をもって東京電機大学の専任をやめます。もっともあとしばらく1週1回ほど講義を続けます。4月以降は日本数学検定協会の仕事を主とする予定です。(一松信)

●定年が近づいていますが、その時まで毎年ゼミ合宿をしますでよろしく。

(専修大学教授・麻島昭二)

●岡先生その後のご体調いかがでいらつしやいますか。傘寿のお祝いのお言葉をいただきありがとうございます。いつの間にかこの年を迎えることになり、陳腐ながら月日の流れの早さに驚いております。くれぐれも御自愛下さいませ。

(日本女子大学図書館友の会・土井恵美子)

●お祝を頂くことに一年一年生命の尊さを感じて生きております。初代館長の遺志を継いで貴施設が益々学問と教育の場として用い

られるようお祈りいたします。

(恵泉女学園短期大学事務部長・島田治夫)

●千人会々費をお届けします。大学セミナー・ハウスの歩みと共に年を重ねさせて頂き、光栄です。

(国際基督教大学学長・絹川正吉)

●本年度の会費をお送りします。神戸も家並みはどうやらですが、まだ以前のようにすっかりなつたわけではありません。時間がかかるでしょう。

(大阪国際大学副学長・茅野良男)

●この3月で定年退職いたします。東洋大学法学部創設(昭和31年)と共に42年間にわたり勤めてまいりました。

(白川和雄)

●在外研究でイタリアから帰国したところで。お払込みが遅れて失礼いたしました。みなさまお元気で!

(文教大学教授・戸田三三冬)

●元気で66歳の誕生日を迎えることができました。今年1月にエジェル・ガーナ、3月にトンガ・フィジーに青年海外協力隊の巡回指導にでかけました。任務を果たせたことに感謝して、今日の誕生日を迎えています。

(東京家政大学教授・河村フジ子)

●誕生日祝いのカードが紛れており、昨晩手にしました。遅くなって申し訳ありませんが送金させていただきます。

(法政大学・若山邦紘)

●米寿の賀詞ありがとうございます。米寿に

ちなんで八、八〇〇円にさせていただきます。

益々の御開拓に望みを託してご活躍を祈ります。

(下妻小友幼稚園園長・福西基)

●喜寿を迎えるに当り、御祝の言葉を頂き、ありがとうございます。幸い健康に恵まれ、研究(制御工学)を続けております。

(上智大学名誉教授・市川邦彦)

●今年もまた楷の木に逢いに行けると思いますが、よろしくお願い致します。

(白梅学園短期大学元理事長・鈴木三男吉)

●ゆきがかかり上いやいや優柔不断で15年間続けた大学の役職から解放され、さわやかな誕生日を迎えました。本日3月31日は記念の日でもあります。

(日本大学教授・室本誠二)

「ご生前のご厚情に感謝し
謹んでご冥福をお祈りいたします」

井深大氏(ソニー(株)最高相談役、97年12月19日没。89歳) 65年のハウス開館式では社会人代表としてメッセージを述べられた。69年、96年の27年間評議員としてご支援下さった。

吉川孔敏氏(元東北大学事務局長、元日本女子社会教育会常務理事、98年1月19日没。79歳) 83年、85年の2年余、ハウスの専務理事を務められた。

市川孝正氏(早稲田大学名誉教授、98年2月2日没。72歳) ハウス開館の65年から93年

までの28年間に計18回ゼミ合宿等で利用され、87年には第24回大学教員懇談会「大学の魅力開発」にも参加された。

友部直氏(共立女子大学名誉教授、98年2月4日没。73歳) 77年、82年の5年間共同セミナー委員を務められ、78年の第99回大学共同セミナー「芸術のたのしみ」(第3回)では指導教授・運営委員としてご奉仕下さった。

寄贈図書

97年12月～98年3月

『絵画を見るということ』 山岸健殿
『大学教育と高校教育』他二冊 広島大学殿
『日本美術館』 山梨学院大学上野敦男ゼミ殿
『京都大学百年史』 京都大学殿

寄付

97年12月～98年3月

〔植樹〕
しだれ桜1株 生活協同組合コープとうきょう 98年度新入職員殿

〔現物〕

絵画『サン・ルイ島のパノラマ』R・ラッフル
スキー作(リトグラフ) 長田洋子殿

業／務／通／信

12月、1月、2月、3月の4ヶ月間の利用状況は、昨年同月間と比較して、36%の減少となった。団体別で見ると、会員校、非会員校、企業社会人団体がそれぞれ19%、52%、39%の減少となったが、学術・教育団体は5%の増加であった。月別で見ると、昨年同月と比較してそれぞれ28%、46%、43%、31%の減少となった。1月から3月までの3ヶ月間にわたって長期滞在するマレーシア政府派遣留学生の利用が半減したにもかかわらず、それを埋めることができなかったことが減少の原因であった。以下、この間にユニークな研修を行なったグループをご紹介します。

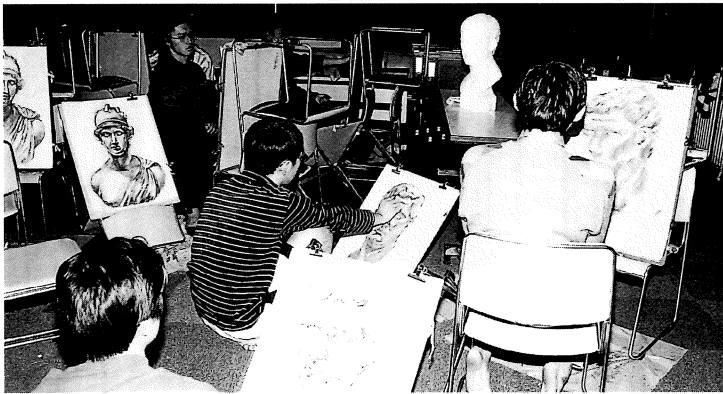
▼床にシートを敷き詰めてグループごとに絵を描いたりなど「遊び」を取り入れた独特の心理療法を展開される首都圏ファンタジーグループ研究会代表の岸良範助教授から、この研究会の活動などをご紹介します。ちなみに岸先生は当ハウスが主催するセミナー「心の深層をさぐるーユング心理学とグループ・ワークー」（一九九〇年開催）に講師の一人として来館されたことがあります。▼大学構内では、時間的にも空間的にも腰を据えてデッサンに取り組むことが難しい。そこで、じっくりとデッサンに打ち込むために合宿を実施しているのだという早稲田大学絵画会の方山岡祐司さんには、サークルでの使い方をめぐってご報告いただいた。美術系サークルの利用は珍しいが、こうしたグループによる活用も今後大いに推奨したい。▼どうすれば高校生から大学生に脱皮できるのか。講義形式の授業だけではなかなか主体的に学習に取り組むことは困難であるとお考えの毎月短期大学・村越洋子教授からは、熱意あふれる教育実践の一こまをご紹介します。

私たちの合宿① 集中してデッサンに打ち込める セミナー・ハウスでの合宿

早稲田大学第二文学部三年・山岡祐司

もう合宿の季節か。またここに帰ってきたんだねえ。セミナー・ハウスに来る度にそう感じる。懐かしくもあり、過ぎ行く季節の速さに寂しさを覚える。

大学の通常活動は、週一回のデッサン会を学内施設を借りて行なっている。もともとは会議室なので、椅子やテーブルを隅に片付けてから、持ち込んだ石膏像を配置しなければならぬ。それ



セミナー室がアトリエ、デッサンに集中できる環境がいい。 —大セミナー室にて

からようやくデッサンに取りかかる。始めるまでのセッティングにどうしても時間がかかってしまう。しかも予約制で時間制限があるため、帰り支度の時間も考えておかなければならない。搬入搬出に随分と時間を取られてしまうので、腰を据えてデッサンに取り組むことがなかなか難しい状況にある。

また、私達のサークルは学内に部屋を持っていないため、学外に倉庫としてアパートを借りている。そのアパートは石膏像（10数体）やデッサンのための道具類、展覧会用の額縁などをおく物置としての利用という契約で安く借りている。そ



一気に作品を仕上げることができる。ゆったりとデッサンに打ち込める合宿ならではの醍醐味 —大セミナー室にて

のため、寝泊まりすることができない。それにアトリエとして使用するには狭すぎるし、底冷えのする日の当たらない部屋なので敬遠してしまう。

そんな訳で、セミナー・ハウスでのデッサン合宿をとっても楽しみにしている。サークルの年間行事として春夏秋冬と年三回利用する。セミナー室をアトリエとして利用することで、普段のデッサン会のような慌しさもなく、ゆったりと活動に打ち込むことができる。それにデッサンばかりでなく、水彩などの創作にも集中できる。自宅などで創作していると、その日その日が終わる毎に片付けなければならない。それに距離を置いて作品を見てデッサンの狂いの修正や配色を整えることが難しい。しかし、セミナー・ハウスに来れば家族に迷惑がられることなくのびのびと描くことができる。合宿ならではの醍醐味である。

それにサークルの中心メンバーが一堂に会するので、終日ミーティングの様相を呈している。夏合宿（八月末）では秋の学園祭の打ち合わせ、冬合宿（十二月下旬）では三月上旬に開催している毎年恒例の他大学との合同展に關して、春合宿（三月中旬）では四月に迫る新入生勧誘企画といったイベントの方向性を考える場にもなっている。

わがサークルの一年は、夏合宿に始まり春合宿に終わる。その一年の節目節目に合宿があり、ひとつの季節が終わわり、次の季節に移り変わる前のしばしの小休止。日々の雑事、日常生活から離れ、普段なにかと気になるあれやこれやに煩わされることなく、じっくりと活動に打ち込める空間。セミナー・ハウスでの合宿は、学生時代の思い出深い生活の一部となっている。

私たちの合宿②

ファンタジーを通して、自分に触れる

首都圏ファンタジー・グループ研究会・代表
埼玉医科大学短期大学助教授
岸 良範

首都圏ファンタジー・グループ研究会は、この十年來、大学セミナー・ハウスを主会場として、ワークショップを続けてきました。いくつかの大学の学生に若干の社会人が交じるのが、参加者の構成ですが、次第にインターカレッジ的な様相を帯び、その範囲は拡がってきています。

ファンタジー・グループは、ユング派心理療法の樋口和彦先生が創始したもので、心理療法の技法の一つであるフィンガーペインティングを用いる「イメージの力動性」を重視したグループワークです。その樋口先生は、人間にとってのファンタジー（イメージ）の重要性を「ある意味で『人間とはファンタジーによって動く一種の動物である』と定義出来るほど人間にとって基本的なものである」と述べています。

さらに、「人間は各々その内的な世界に様々なファンタジーを抱くが、それは個人に占有されるばかりでなく、人々によって共有される」ものであること、また私達の持つファンタジーが、自らのものでありながらも個人を超えたものでもあることなどもこのワークの狙いの一つでもあります。

参加者たちは、ワークを続ける中で、自分の内側からいやおうなくあらわれる自分の姿に直面したり、他者との関係の中で湧き上がる内的な世界を見つめ、また他者とのイメージの共有ということを体験することになります。

このグループのスケジュールは、一泊二日が基本ですが、その中に、フィンガーペインティング、カッティング、粘土による造形の三つのセッションがあり、各グループにつき世話人（グループメンバー）が自由に活動できるようにお話しする人とともに、その体験を深めていくこととなります。フィンガーペインティングでは、5〜6人のメン

バーが無言の内に全紙大の白紙に粉絵具をニカワで溶いたものを、指や手のひらを使って絵を描くこととなりますが、このセッションは、時にはかなりの退行促進のプロセスとなり、メンバーのそれぞれば、思いがけない自分の姿に出会うことにもなります。そしてそのような退行のあとで、新たな創造の世界に至ることになります。



これら一連のプロセスでは、グループの中の一入ひとりの自己表現を中心としながら、グループがどのような体験をしたかが、個人的視点と全体的視点から捉え直されます。そして時には人生の意味、宗教的象徴的理解がメンバーの自己理解として行なわれることもあります。このようなテーマが表れることもありますが、何よりも大切なことは、全体のプログラムを通して

「生き生き」と「楽しさ」が感じられることが重要と なっています。 どうぞ、機会が ありま したら 参加し てみて 下さい。 他者との 関係の中 で様々 にうつろ う自分 のファン タジーと つきあ えるか もしれ ません。



右上：完成した作品を前にして感慨無量なおももち——大学院生とファンタジー・グループのメンバーが、ワークショップを終えて、後列左が岸良範助教授

私たちの合宿③

大学セミナー・ハウスで 大学生に変身

大月短期大学教授 村越洋子

「日々、生きていく中で、くじけそうになる時、ふと先生のことを思い出します。二十二年も前のことなのに、八王子で開かれた『村越セミナー』での思い出。プリントが今だにありまして、仲間として先生と語り合ったことなどを一つの励みにして、今日も頑張ったなあと思いつつ毎日を送っています。これは今年の年賀状、教師冥利につきる内容です。そして、それは大学セミナー・ハウスでなければできないゼミ合宿への賛辞でもあるのです。

大学での講義形式の授業だけでは「大学生」を感じない学生に出会ってからは、私は毎年、教職課程の学生と私のゼミの学生とで、この八王子の大学セミナー・ハウスでゼミ合宿を続けています。大学（大月市）に近いこと、経費が安いこと、アカデミックな雰囲気があることなどもかなり大きな理由ですが、私のゼミ合宿には欠くことのできない「キャンプファイヤー場」と「野外ステージ」があるからです。

初期の頃、アカデミックさを私自身が意識して、セミナー室での論文講読が中心で自己満足していました。けれど学生の「これじゃ学校にいてもできる。なんのために合宿にきたのか」という一言で私は大きなボディブローを受けました。

それ以来「そうだ、学校ではできないことを合宿でやろう」が私のゼミ合宿の信条になりました。



楽しい即興劇を終えて、余裕の笑顔が見られる村越洋子教授（前列右から2人目）と学生たち——野外ステージにて

「心と体をひらく」ために、このような自然の中で、できたことがうれしく思えた。村越先生の《普段は使えない所を使う》というのも、すばらしい発想だと思います。野外ステージなんて普段なら絶対に使えないし、キャンプ場もほとんど行ったことがありません。その中でみんなでのびのび授業ができて楽しかった」という学生の感想文に出会うとますます大学セミナー・ハウスでのゼミ合宿に熱がはいります。

「普段の学校では他人の目ということが気になって絶対にできないであろう即興劇などができ、新たな自分というものを引き出すことができ」という学生の感想文に示唆されて、私のゼミ合宿は、学校ではなかなかできない《変身》、つまり横並びの《高校四年生》から、自分の能動性を引き出し、自分らしい生き方を造っていく《大学生》になるそのきっかけを実践していくことが目標になっていきます。

それにはまず信頼できる仲間が必要です。だから私は、大学セミナー・ハウスに着くと、天気が崩れないうちに真っ先にキャンプファイヤー場に飛び出します。

そして、チームに分かれて大縄跳びなどのゲームでがっちりチームワークをつくり、緊張を捨て、堂々と恥のかける仲間づくりをします。そして、朗読やパントマイムなどを無理なく少しずつできるようにし、最後にチームで即興劇を演じます。

「大学生を感じた瞬間」にゼミ合宿を終えられ、食欲な学生生活がこれらを待っているのです。

利用状況

'97年12月、'98年3月
* 11月2回利用
日帰りを除く

■12月(49グループ、延一、六七〇人)

中央大学・慶應義塾大学・東洋英和女学院大
学対抗ゼミ

東京都立大学生物学セミナー

立教大学教授 村上 和夫

アイセック立教大学委員会

明治大学教授 久保田義喜

慶應義塾大学アジア法学生協会

東京都立大学教授 日向野幹也

恵泉女学園短期大学英文学科総合科目「国際」

埼玉大学講師 江口 幸治

早稲田大学教授 平澤 茂一

早稲田大学講師 中村 泰将

東京農工大学助教授 野間 竜男

東京理科大学教授 狩野 紀昭

東海大学教授 津田 慎一

青山学院大学助教授 稲積 宏誠

一橋大学助教授 蓼沼 宏一

東京外国語大学助教授 今井 昭夫

東京都立大学リーダーズキャン

中央大学講師 鈴木 寛

立教大学助教授 有馬 賢治

日本大学教授 佐々木有司

杏林大学教授 千葉 洋

東京大学教授 庄司 興吉

東京外国語大学助教授 根岸 雅史

早稲田大学絵画会

東京外国語大学リーダーシップトレーニング

工学院大学教授

工学院大学助教授

国士館大学教授

都留文科大教授

大月短期大学

学習院女子短期大学講師

日本獣医畜産大学教授

山梨学院大学教授

山野美容芸術短期大学教授

都留文科大講師

立正大学講師

東洋大学助教授

郡内研究会

第176回大学共同セミナー

日本レクリエーション協会

メタコミュニケーションズ

AITC

文学教育研究者集団

オール・ケイ・トラック/パソコンソフトバン

ク/アネルバ

〈個人利用〉

中央大学*

■1月(24グループ、延一、二二六四人)

一橋大学教授

東京理科大学教授

東京外国語大学助教授

中央大学教授

東海大学教授

東京都立大学助教授

東京学芸大学講師

法政大学助教授

中央大学教授

帝京大学講師

実践女子短期大学教授

吉田 倬郎

遠藤 和義

吉田 襄

三井須美子

村越 洋子

関根 康正

松本 洋一

上野 敦男

森 清

若林 俊輔

厚東 偉介

秋山 哲一

埼玉医科大学短期大学助教授 岸 良範

東京神学大学第29回教職セミナー

マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシ

ア科学技術フォーラム)

第15回大学教員研修プログラム

「かわりの発達と歪み」研究会

感性を育てる会

メタコミュニケーションズ

からだところの出会いの会

少年写真新聞社分会/明治アグリ

■2月(48グループ、延三、〇四八人)

中央大学・東洋大学合同森田ゼミ

工学院大学教授

中央大学講師 菅原 和子

駒澤大学助教授* 谷敷 正光

津田塾大学教授 江尻美穂子

共立女子大学手話サークル

明治大学教授 風間 信隆

東京都立大学助教授 山川 仁

中央大学助教授 久保 文克

立教大学講師 村瀬 洋一

中央大学経済学部行事実行委員会

慶應義塾大学教授 横手 慎二

青山学院大学教授 長谷川浩一

帝京大学明日の会

中央大学学友会文化連盟音楽研究会

駒澤大学教授 瀬戸岡 紘

青山学院大学教授 寺東 寛治

明治学院大学人形劇団ZOO

帝京大学書道部

早稲田大学教授 新澤 雄一

法政大学教授 加太 宏邦

成蹊大学文化会本部リーダーズ・キャン

明治大学学生保険委員会

駒澤大学教授

千葉大学教授

日本大学教授

東京学芸大学教授

日本大学マスコミュニケーション研究会

東京都立大学日本史ゼミ

中央大学法学研究科自主勉強会

創価大学教授

産能大学助教授

聖学院ハンドベルクワイア

聖学院大学・女子聖学院短期大学キリスト教

八王子合宿

マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシ

ア科学技術フォーラム)

朝日カルチャーセンター・横浜

奇術クラブ「マジック・エコー」

万国ローア・バプテスト福音伝道協会

メタコミュニケーションズ

日本山岳協会

東京キリストの教会

国際交流サービス協会/日本ピー・オー・ピ

ー広告協会/東京バンケットプロデュース

〈個人利用〉

V研究会*

吉阪セミナー

中央大学通信教育部

■3月(76グループ、延四、五八一)

駒澤大学助教授 谷敷 正光

日本女子大学講師 坂田 仰

東京大学助教授 藤原 婦一

駒澤大学教授 寺中 良二

中央大学教授 田中 拓男

埼玉大学教授 山口 和孝

千葉商科大学教授 菅沼 憲治

石井 啓雄

武蔵 武彦

根本 忠明

小川 博久

長谷部秀隆

根来 龍之

東京学芸大学講師 中央大学講師 中央大学社会学会読書会 慶應義塾大学英語會 日本大学教授 日本大学教授 明治学院大学教授 東京外国語大学助教 東京理科大学教授 早稲田大学絵画會 東京経済大学文化会本部リーダーズマンキヤ ンプ	投野由紀夫 遠藤 喜佳 馬場 昭 木暮 雅夫 橋本 敏雄 渡邊 啓貴 狩野 紀昭	上智大学教授 明星大学教授 自治医科大学助教 敬和学園大学講師 神奈川大学教授 東京会計法律学園職員研修* 国士館中学・高等学校英語科教員研修 和光大学講師 獨協大学教授 マレーシア政府派遣留学生(日本インドネシ ア科学技術フォーラム) 郡内研究会 十大学合同セミナー 首都圏ファンタジー・グループ研究会 言語研究会 フランス語応用普及協會 國分カウンセリング研究会 DISCON(吉阪隆正+U研究会 システム連合 ワークキャンプ同窓會 第八回日独地理学会議 日本国際交流振興會 上智キリスト者学生会OB會 文学教育研究者集団 国際教育交流協會 アガベネットワーク/ヒューマンライフセン ター/富士電機/学究社/生活協同組合コー プとうきょう/アイワールド (個人利用)	ロジャー・ダウニー 光成 豊明 加藤 直克 福王 守 深澤 俊昭 西 研 宮川 淑
明治大学教授 東京学芸大学ESS 千葉大学助教 千葉大学助教 中央大学教授 中央大学アナウンス研究会 早稲田大学コンツェルト 東京大学比較文学比較文化研究室 東海大学講師 立教大学助教 杏林大学教授 アイセック早稲田大学委員会 大妻女子大学教授 東京薬科大学生活協同組合 明治大学教授 日本大学教授 中央大学教授 横浜国立大学体育系指導者セミナー 東京工業大学SRIID 中央大学レスリング部 早稲田大学教授	竹下 俊郎 佐藤 宗子 工藤 秀明 長内 了	大野 清志 播 里枝 佐藤 健一 長谷川幸生	稲野 強 濱田 辰雄 石川 賢司 山口十六夫
高瀬 浄	静岡大学教授		

セミナー・ハウス

1997年12月1998年1・2・3月分(年回)
第150号

発行=財団法人 大学セミナー・ハウス
〒192-0372 東京都八王子市柚木1987
TEL0426-76-8511 FAX0426-76-1220
振替口座 00150-1-74590

発行人=岡 宏子
編集=大学セミナー・ハウス企画室
制作=中山企画

SEMINAR HOUSE
The Quarterly Journal of Inter-University Seminar House
No.150 (December,1997~March,1998)

大学教員研修プログラム委員会編 大学改革を斬る

● 1997年12月25日発行
● 四六判・205頁・定価2,000円

〔座談会出席者〕

絹川正吉(国際基督教大学学長)・蟻山道雄
(上智大学教授)・井下 理(慶應義塾大学
教授)・亀山純生(東京農工大学教授)・小
林志郎(東京学芸大学教授)・佐々木一也
(立教大学助教)・建部正義(中央大学教
授)・丹羽 泉(東京外国語大学助教)・
原 一雄(亜細亜大学教授)・福田一郎(東
京女子大学教授)・宮腰 賢(東京学芸大学
教授)・山内正平(千葉大学教授)・岡 宏
子(聖心女子大学名誉教授/大学セミナー・
ハウス館長)

カリキュラム改革をめぐる、大学セミナー・
ハウス大学教員研修プログラム委員会メ
ンバーによる白熱の議論十二時間。大学設置
基準大綱化の大波は何をもたらしたのか。大
学はどこに行こうとしているのか。二十一世



紀の日本の大学の将来像を浮き彫りにし、く
つきりと描き出す。

〔内容・目次より〕

大綱化の結末―東京農工大学の場合/総合科
目とは何か/資格認定を教育に生かす/高校
生の質の変化と社会人としてのリベラルア
ーの必要性/「幅広く深い教養」か、専門へ
の基礎科目か/学生の共有文化とコンベン
ション/専門教員の教養担当能力/学部教育
の空洞化/教養の幻想/社会の要請と学生の
要請/クール・ヘッドとウォーム・ハートと
社会正義―中央大学商学部金融学科の場合/
基礎学力と構造的思考概念/エリート教育か
大衆教育か/専門分化により失われた人間性
の回復/エリート意識の裏返し/実体験によ
る教育と大学入試/リベラルアーツ、人間性
教育をどう捉えるか―東京女子大学の場合/
大綱化と単位合わせ/四年間で教員養成がで
きるか―東京学芸大学の場合/語学は基礎学
力/日本文化を知らない若い日本人/入学試
験をどうするか/教員の任期制と給与体系/
教員の評価基準/教員の総合評価と卒業生の
資質保証/社会奉仕活動/教員評価の難し
さ/学科の受験広報/教養部の解体―立教大
学の場合/取りたいときに取りたい科目を―
慶應義塾大学湘南キャンパスの場合/多様な
価値観と方法論/世界を股にかけたカリキュ
ラム改編―東京外国語大学の場合/授業料に
見合った教育

※注文は、大学セミナーハウス企画室まで。
(0426-76-8511)

表紙の写真は新緑のセミナー・ハウ
ス野外ステーション付近。